

# 寒小ギク栽培におけるウーロン茶粕発酵堆肥の施用量 — 1年に3t/10aが適量 —

## 1. はじめに

近年、未利用資源を有効活用し、環境負荷を軽減しようとする取り組みが盛んになっています。そこで、ウーロン茶粕発酵堆肥（ウーロン茶飲料の製造過程で使用した茶葉を堆肥化したもの：以下、ウーロン茶堆肥）の寒小ギク栽培における施用量を3年間検討したので結果を紹介します。

## 2. 方 法

試験は、暖地園芸センター内の露地ほ場（黄色土）で行いました。和歌山県農業協同組合連合会で製造したウーロン茶堆肥を供試し、

1作あたりの施用量を各区 0、2、3、4 t/10aとして5月下旬に全面施用しました。一方、対照として牛糞オガクズ堆肥 2 t/10a区を設けました。6月上旬に挿し芽苗を畝幅120cm、条間30cm、株間13cmの2条植えで定植し、1回摘心後株あたり3～4本仕立てとしました。基肥には粒状苦土石灰 100kg/10a、粒状固形30号（10-10-10）160kg/10aを、追肥は8月中下旬に粒状固形30号80kg/10aを施用しました。

3年間、土壌のpH、EC、腐植含量、切り花の収量および品質を調査し、3年目に土壌の全窒素量を測定しました。

## 3. 結 果

収量は、1年目を除いてウーロン茶堆肥3t区およびウーロン茶堆肥4t区が多く、切り花

表 1. 寒小ギクにおける堆肥の施用量と商品収量および切り花重

試験区	収量* (本/株)			切り花重(g)		
	1年目	2年目	3年目	1年目	2年目	3年目
ウーロン茶堆肥 4t	2.8	2.0	3.1	87	59	86
ウーロン茶堆肥 3t	2.7	2.2	3.0	87	47	74
ウーロン茶堆肥 2t	2.0	1.7	2.7	81	52	71
牛糞オガクズ 2t	3.0	1.9	2.8	85	51	56
無 処 理	2.4	1.4	2.3	68	35	61

\* 収 量: 総収量のうち商品性のある切り花収量  
供試品種: 1年目「桃園」、2年目「紀州紅」、3年目「星まつり」

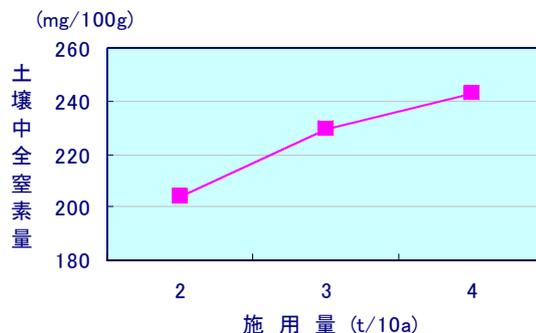


図1. ウーロン茶堆肥の施用量と土壌の全窒素量  
3年目の作付け前の数値

重は、3カ年ともウーロン茶堆肥4t区が重くなりました（表 1）。

いずれの区も栽培中の土壌pHは低下し、栽培終了後に再び上昇しました。ECは、ウーロン茶堆肥の施用量が多いほど高くなる傾向が見られました。土壌の腐植含量は、無処理区では年次毎に減少し、ウーロン茶堆肥2t区、ウーロン茶堆肥3t区、ウーロン茶堆肥4t区および牛糞オガクズ堆肥2t区はおよそ2.9%まで増加しました（データ省略）。土壌の全窒素量は、ウーロン茶堆肥4t区が243mg/100g、ウーロン茶堆肥3t区が229mg/100g、ウーロン茶堆肥2t区が204mg/100gとなり、施用量に対して全窒素量の増加が頭打ちになる傾向が見られました。（図 1）。

## 4. まとめ

寒小ギク栽培においてウーロン茶堆肥の施用は、腐植の増加と増収および品質向上に有効であり、黄色土の場合、窒素の流亡による環境負荷を考慮すると1年あたり3t/10a施用がよいと思われます。

（園芸部 伊藤吉成）